

理事からのメッセージ

TTC創立40年を迎えて
～標準化活動及び従事者の役割～

理事
古賀 正章(KDDI株式会社 先端技術統括本部常勤顧問)



情報通信サービスは電話からインターネットやモバイルへ目覚ましい発展を遂げ、性能や利便性も著しく向上しました。技術やサービスだけでなく、事業環境も変革が急速に進んだこの40年間、標準化は極めて大きな役割を果たしてきました。

1990年代前半、モバイル通信はデジタル化され、携帯電話がコモディティ化すると共に急激に加入者数を伸ばしました。日本では、PDC方式に加えてCDMA2000方式も登場し、世界的にはいくつかの方式が乱立しましたが、1990年代後半になると、世界的には、PDCと同じTDMA方式を活用したGSMをCDMA2000が追いつける展開になり、3Gの方式は事実上CDMAに統一されました。3GPPと3GPP2が設立され、2000年代前半には、通信業界では標準化が当たり前の時代となりました。これら二つの団体は、競い合ってフォーラム標準を策定し、スマートフォンが登場した2000年代後半には、AndroidとiOSの競争という所謂デファクト標準の隆盛を横目でみながら、モバイルの発展を牽引しました。そして、4GにはOFDMA方式が採用され、2010年代前半に3GPPに一本化されました。3GPPでは、2010年代後半には、LTE-Mに代表されるモバイルIoT技術、その後、5Gが標準化されました。現在は、5G-Advancedという名称で標準化が進んでおり、AI等の最新技術を取り入れて進化し続けています。6Gのスタディも始まります。

通信業界はグローバルに発展してきたため、従事されてきた方々にとっては世界で戦うことが当たり前であり、本当に苦勞されてきたと思います。3GPPは、絶妙の地域バランスにより、立派なTSGやWGの議長・副議長が輩出され続けており、日本メンバーも3GPPでプレゼンスをキープし続けています。3GPP活動を支え続けていただいているTTCやARIBの方々には、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

近年では、O-RAN Allianceのような3GPPを超えた標準化活動も定着してきて、実力のあるRANベンダーがグローバル市場に入りやすい環境も構築されて

きました。RANベンダーをはじめ日本の会社は、この機会を捉えて事業拡大に結びつけると期待されます。ここまで、代表例としてモバイルの標準化について記しましたが、通信業界には分野毎に下位レイヤから上位レイヤまで様々な標準化活動が存在してそれぞれが重要な役割を持っているという過言では無いでしょう。

通信事業者においては、通信収入だけで成長できる時代はかなり昔に終わっており、通信を非通信サービスに溶け込ませ自らも新事業として取り組むことで、成長を続けています。5Gが5G x AIに進化していくと、よりパワフルに非通信サービスに溶け込んでいくと思います。また、世界の通信事業者は一丸となってサービスAPIを提供する動きを活発化させており、世界を視野に入れたアプリやサービスの創出に寄与していきます。

例年、3月バルセロナでGSMAが主催するMWC (Mobile World Congress) が開催され、通信業界が発展していく姿を予見することができます。昨年はAIに関する様々な取り組みがショーケースされてきましたが、今年は、AIエージェントも駆使し実用レベルで具体的なユースケースとして成熟されてきた印象を持ちました。時代の流れはとて速いですが、通信業界はその最先端にあり、日本の会社もしっかりプレゼンスを示しています。

これからの10年間は、AIがイノベーションを牽引し、あらゆる業界に変革をもたらすことが予想されます。AIを活用したデジタルトランスフォーメーションに関するご相談は、通信事業者を含めて通信業界のプレーヤーにお任せいただければ、お客様のニーズにお応えして、自前に拘らず優れたものを柔軟に取り組み合わせて提供できると考えます。また、ビジネス創出の検討の場にも、標準化活動に従事する人々の知見がもっと生かされるようになっていくでしょう。標準化関係者が力を合わせて、そういう「意識」や「思い」を持ち続けられれば、標準化活動はさらに発展していき、明るい未来を提供し続けることができると祈念します。